

## 見晴台支え合い見守りづくり⑦

このコラムは、4年前、平成30年6月（通算280号）から掲載が始まり、江別第一包括支援センターと連携し「支え合い、見守りづくり」に関する情報提供の場として継続してきました。当初は、健康福祉部、事務局共同の執筆でした。

これまで、多くの情報を皆様にお伝えし、自治会としての「高齢者を見守っていく」姿勢を示してきたのではないかと自負しています。今後もこの姿勢は続けていきたいと考えていますが、今回は、ちょっと視点を変えて、私たちの住むこの見晴台に、いつのころから人々の営みと支え合い・見守りがあったのだろうかを探ってみようと思います。

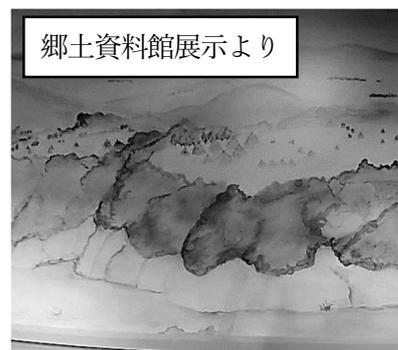
## むかし、むかし…その壺(イチ)

まず、地球の歩みから、簡単に振り返ってみましょう。

46億年前に、微惑星の衝突で誕生した地球は、マグマの塊の状態から水を含んだ微惑星の吸収により海の生成と地表温度の低下をもたらし、様々な生物が誕生し繁殖するようになりました。その後、何回かの氷河期と地殻変動を繰り返して、人類の出現と共に現在の大陸や日本列島が形づくられました。

最終氷期の後も、気温の寒暖を繰り返しました。気温が低い時は、氷河が拡張するため海面が低下し陸地が広がり、大陸と陸続きとなりナウマンゾウやヒトも大陸から渡ってきました。反対に気温が上昇すると、氷河が溶け出し海水が増え、海が内陸まで入ってきます。

いわゆる「海進」と言われるもので、6000年前の縄文時代の海進では、海岸線が深く入り込み「古石狩湾」は野幌丘陵まで迫りました。元江別や見晴台の北側は、海岸線だったのです。5丁目通りを工業町に向かうと見晴台を過ぎたあたりから下り坂になり、旧豊平川と平行して崖が連なっています。(右図)そこが、海進の時の石狩湾の波打ち際だったのです。



江別市で最初に人類の営みが認められるのは、縄文時代の海進の時期と同時期ですが、数は、極わずかに過ぎません。

時代が進み、縄文中期(3000～2000年前)になると、当時の地層から石器や土器が出土、住居跡や付属施設も数多く見つかっています。平成11年まで行われた「高砂遺跡」調査では、200軒の住居跡が発見されました。今日の住宅団地と言えそうです。

直径3～4メートルの住居は、カマドやベンチ等が備えられ、集落の周りには、動物を狩猟するための仕掛けもあったようです。また、住宅の入口は共通して南に向いて開けられていました。おそらく、冬の北風を避けるためだったのでしょう。当時の人の生活ぶりを、様々な観点から思い描くことができます。

私達の住むこの場所は、日本でいえば北の外れで、人が住み出したのは随分後になってからではと思っていましたが、そうではないのです。太古の昔から人が住み、支え合いながら生活してきたと言えるのです。

江別市では、野幌丘陵の裾野にあたる様々な所で遺跡が発掘されています。その成果は、江別市郷土博物館に展示されていますので、是非ご覧いただければと思います。

次回は、少し時代が進み「弥生時代」以降にあったことを掲載します。

〔事務局〕

## むかし、むかし…その弐(二) “見晴台に古墳が!?”

今回は、前号でお知らせした弥生時代以降のことについて掲載しますが、その前に、先史時代の区分を簡単に確認しておきましょう。

旧石器時代の後、紀元前（BC）1万年前～紀元前3世紀を「縄文時代」と言い、その時代の地層から出土するのが縄文土器です。

その後、本州では稲作文化が伝来し、紀元後（AD）300年までを「弥生時代」と言いますが、米づくりがまだ始まっていない北海道では、縄文時代が続いていました。

本州の「弥生時代」から「古墳時代」と並行して続いた北海道の縄文時代を「続縄文時代」と言います。それは、金属器の伝来で居住環境も変わり、新たな文化を創り出したということで、それまでの縄文時代とは区別して「続縄文時代」と呼ばれます。

「続縄文時代」の次に登場するのは、「擦文（サツモン）時代」と呼ばれる時代です。これは、表面にへら状の道具でこすった擦痕（ハケメ）や刻文の見られる土器が出現することから、そう呼ばれています。擦文土器は、本州の弥生時代の土器の影響を強く受けながら発展し、当初、江別を中心とする石狩低地帯で作られ、その後、道東北部、サハリン南部に広がって行ったと考えられています。また、土器の製造方法ばかりではなく、刀剣類や農耕具などの鉄製品も本州からもたらされています。

日本に稲作が伝わる以前の縄文時代は、狩猟採集経済で、集落も無かったと考えられています。ところが、弥生時代になり稲作技術が伝えられると、人々は一つの土地に定着し、生産性を上げるためにより広い土地を求め、争いも起きます。やがて強い支配者が生まれ、ムラができクニができます。クニの首長の死後は、墳墓＝「古墳」に葬られました。7世紀になると、気温も温暖化し、東北地方北部まで稲作が可能になりました。それに伴い、青森まで古墳が作られるようになりました。さらに、「擦文時代」の私たちの江別にも、古墳（墳墓）が造られていました。



<江別市郷土資料館「江別古墳群」より>

しかし、まだ稲作がされていない北海道の江別で、どうして古墳が造られたのでしょうか？その謎を解くのは、古墳から出土した遺物にあります。

江別の古墳は、昭和初期、後藤寿一氏によって見晴台北端で発見され、その後、昭和55年西インターチェンジ建設で20基以上の古墳群が見つかりました。その副葬品には、土師器（ハジキ）と呼ばれる土器や須恵器、刀、勾玉等が含まれています。これらは、本州との有力者や朝廷との交流があったこと、あるいは有力な移住者がいたのではないかと考えられています。

古墳は、私たちの住む見晴台にある遺跡です。ぜひ、散歩がてら古墳に足を運び、どんな人がこの地に住み、どんな暮らしをしていたのか、想像してみるのも楽しいことです。

今回は、明治前夜までを予定しています。

〔事務局〕

## むかし、むかし…その参(サン) “江別チャシ”

北海道には、江戸時代後期の松前藩が登場するまで、比較的自由に様々な人々が交易や砂金採取に往来していました。しかし、何とんでも、アイヌの人々が最も古くから北海道に定着していたことは疑いもないことで、北海道の先住民と言えます。

17世紀当時、北海道には、以下に示すアイヌの五大勢力があったとされています。

- ①「内浦アイヌ」：渡島国縫以南内浦湾西岸
- ②「余市アイヌ」：余市を中心に宗谷までの日本海側
- ③「石狩アイヌ」：石狩平野と増毛に広がる
- ④「シュムクル」：新冠を拠点とし、札幌・江別までを含めた西の衆を意味する
- ⑤「メナシクル」：静内を拠点とした釧路に広がる東の衆を意味する  
(シャクシャインが惣大将)

文字を持たないアイヌは、歴史や生活の知恵は全て口承で語り伝えられてきました。「ユーカラ(叙事詩)」は、その一つです。記述された記録が無いことから、古代の歴史の確かなことは解りませんが、17世紀になると、松前藩の記録にアイヌについて記載が登場し、当時の様子を知ることができます。

松前藩は、徳川幕府から蝦夷(エゾ：北海道)の警備を請け負う交換に黒印状をもらい、アイヌと和人の交易を管理・支配していました。

大名と同等の松前藩ですが、米の生産がないことから、石高(コクダカ：農業生産額を米生産高に換算したもの)に経済基盤を置くことができず、藩財政はアイヌとの交易によって得た利益のみでした。

和人はアイヌに、米・酒・麴・タバコ・塩・鉄製品(鍋や小刀)・衣類(古着、反物、糸)・漆器を提供し、アイヌからは、獣皮(熊、鹿、ラッコ、アザラシ)・海産物(干鮭、干鱈、鮑、昆布)・薬類(熊の肝、オットセイ等)を持ち寄り交換しました。

この様に、松前藩にとってアイヌは、藩を支える重要なパートナーとなっていきましたが、同時に、アイヌの生活にも大きな変化をもたらしました。アイヌの「漁猟民であり農耕民」から「交易民」への転換です。和人との交易で、米や食器・衣類や鉄製道具までもが手に入るようになり、ものをつくるものがなくなったと思われます。

また、交易経済の中に置かれたアイヌは、対和人との軋轢も生みました。私たちが一度は聞いたことのある「コマシャインの戦い(1457年)」や「シャクシャインの戦い(1669年)」は、その代表的な出来事でした。これによってアイヌの弱体化が進み、さらに、「クナシリ・メナシアイヌの戦い(1789年)」に敗れたことを最後に、アイヌの和人による被支配体制化が出来上がっていったと考えられます。

アイヌによって戦いの防塞拠点として砦が造られました。それが、「チャシ跡」です。

江別には、2か所確認されていて、現在でも見ることができるのは、旧豊平川河畔段丘上にあります。

チャシ跡に立ってみると、旧豊平川を挟んで工栄町の工場群が一望できます。

江別古墳の並びにある「チャシ跡」です。

ぜひ、訪れてみてはいかがでしょうか。

次回は、明治の開拓時代です。



※参考資料「新 江別市史」

〔事務局〕

## むかし、むかし…その四 “ツイシカリの登場”

明治前後の北海道に大きな業績を残した人物と言え、松浦武四郎の名をあげる人が多いと思います。北海道の名付け親であり、探検家であり、アイヌの現状をルポルタージュした作家でもありました。

武四郎は、1818年三重県松阪市の郷土（農村で暮らした武士）の家の4男として生まれ、17歳で出家して全国行脚の旅に出ています。27歳で初めて北海道に渡り、知床まで来ます。その後、6回に及ぶ蝦夷地探検の末に記された資料を基に、90冊にも及ぶ地名地図や紀行日誌（石狩日誌、天塩日誌、夕張日誌）を刊行し、1869年（明治2年）には、開拓判官（長官、次官に次ぐ地位）に就いています。

その6回の蝦夷地渡航の内、三回江別に立ち寄って、当時の様子を記しています。

松浦武四郎が、弘化3年（1846年）に、樺太から宗谷・石狩川を通過してエベツ（江別）・千歳に抜け、江差に至った二回目の蝦夷地探検をし、その際に、見聞きしたことを「再航蝦夷日誌」に記しています。その中に、対雁のことについても書いています。

以下、その抜粋です（現代語訳）。

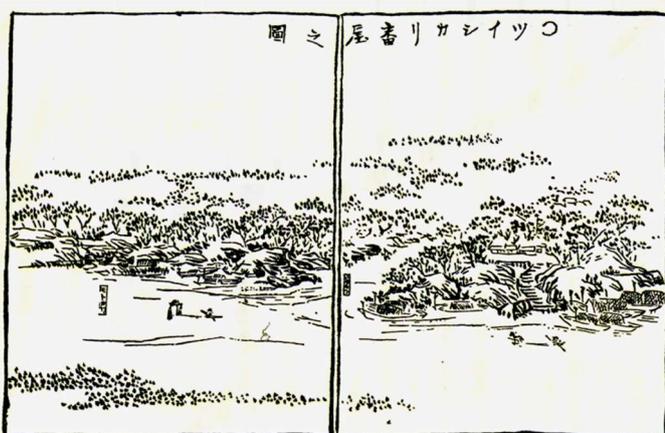


図 2-8 ツイシカリ番屋之圖「再航蝦夷日誌」  
出典：吉田武三校註『三航蝦夷日誌（下）』1971年（吉川弘文館）

…… “ツイシカリには、茅葺の大きな番屋や蔵、弁天社があり、さらにアイヌの小屋も五、六軒連なっている。先述のとおり、この番屋は文政年間にシノツ方面から移転したものだ。アイヌの家にはヒグマ、鷲、フクロウ（アイヌにとってフクロウは神の鳥）が飼われている。

土地は肥沃で、大豆、インゲン豆、カボチャ、茄子、大根、稗、じゃがいもなどを栽培しているが、松前藩はアイヌの畑作を禁止しているため、役人に見つからないように作っている。

石狩川では鮭のほか、チョウザメ、チカ、ヒラメ、ソイなどが捕れる。” ……

今から180年前のツイシカリの賑わいや石狩川の豊かさが伝わってきます。

場所請負人が管理し、物流の拠点であり千歳方面への入り口だったツイシカリは、札幌に開拓使が置かれた明治4年5月25日（1871年）付開拓使民事局布達によって、対雁村となりました。札幌村も含めた9村の一つでした。この対雁村が近代的な行政の体裁を整えるのは、明治39年（1906年）三村（江別村、対雁村、篠津村）合併して江別村になるまで待たなければなりません。

今回は、“江別開拓のはじまり”です。

〔事務局〕

## むかし、むかし…(その五) “江別開拓のはじまり”

新石狩大橋の麓、工栄町の外れに榎本公園があります。公園の名称は、箱館戦争の五稜郭で官軍と戦い敗れたものの、明治政府の外務大臣にまでなった榎本武揚が開拓使から払い下げを受けて、農場経営を行わせた土地であることに由来しています。

公園の入り口に、「史跡 津石狩(対雁)番屋」と書かれた説明板があります。これには、三百年前から商場として栄え、駅通や戸長役場が置かれ、江別の中心だったことが書かれています。また、対雁はもともと「津石狩」という表記で、津＝港を表し、豊平川が石狩川に合流する水運の要衝だったことで「津」が付いたとも書かれています。

明治になり維新政府は、外交問題(不平等条約の改正、領土の確定等)解決のために蝦夷地開拓を緊急の課題とし、明治2年(1869年)7月に「開拓使」を設置し、同年8月15日蝦夷地を「北海道」と改称しました。

北海道の開拓のためには、移民を募集し土地を開拓せねばならないために、「移民扶助規則」を定め一定期間移民の生活を保障することになりました。

江別に最初に入った移民は、明治4年(1871年)現在の宮城県北東部に位置する桶谷町からの21戸で、対雁(現在の工栄町工業団地周辺)に入植しました。対雁は土地が肥沃で、入植した翌年には大豆などを収穫しています。

しかし、入植して2年後の明治6年には19戸が対雁を離れ、今日の札幌に移転しました。当時の記録によると、穀物や野菜を消費地である札幌に運ぶ流通経路がなかったことが原因だったようです。

因みに、桶谷の人達が移り住んだ地名を「雁来」と名付けました。“エベツの対雁から来た”という事実を忘れないためだったと言われています。

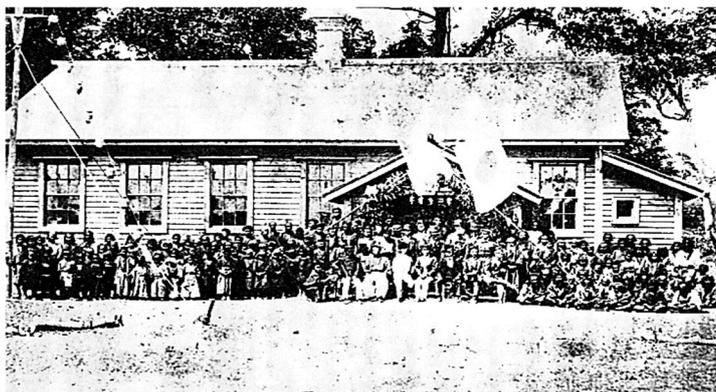


写真 3-2 対雁学校 校舎新築開業式 明治 13 年 6 月

桶谷移民が去った後の対雁は、明治9年(1876年)に樺太(サハリン)アイヌ854人の移住があり大層賑わうことになります。

アイヌの人たちのために学校も作られました。北海道の教育史で、最も古い学校として登場します。これが、後の私たちの住む見晴台にある対雁小学校の前身です。

樺太アイヌの人たちは、製網所や漁労に従事したようですが、明治19年～20年のコレラの流行で300人以上が亡くなり、生き残ったアイヌの人たちも、ほとんどが樺太に帰ってしまいました。

これによって、対雁はその後衰退していきます。

(樺太アイヌの対雁での様子については、小説『熱源』に記されています。この作品で、川越宗一は第162回直木賞に選ばれました。)

※次回は、「江別開拓②屯田兵」です。

〔事務局〕

## むかし、むかし… (その六)

### “ 江別開拓② 『屯田兵』 と 『番外地』 ”

実質的な江別の開拓は、屯田兵によるものでした。

屯田兵が設置された背景には、幕末からの対ロシア防衛と廃藩置県により失職した武士達による社会不安があったからと言われてしています。

黒田清隆(後の開拓使長官)の提案した屯田兵の設置目的は、①北辺の守り(国防)、②北海道の開拓、③貧窮士族の救済、さらには④治安維持でした。

	屯田名	入地戸数	入地の年	主な出身地
1	江別	158戸	(明治) 11、17、 18、19	岩手、青森、秋田、山形、 石川、福島、鳥取、佐賀、 熊本、鹿児島
2	篠津	59戸	14、18、 19	岩手、青森、山形、石川、 鳥取、佐賀、熊本、鹿児島
3	野幌	225戸	18、19	石川、広島、山口、鳥取、 佐賀、熊本、鹿児島

屯田兵の資格は、本人を助け開拓に従事する“強健にして兵農に堪えうる体力を有する家族(妻、兄弟姉妹、父母)二名以上”とされました。

最初の屯田兵は、明治8年5月の琴似屯田入地から始まり、江別地区には表に示すように、何期かに渡って入地しています。

明治11年(1878年)8月29日、10戸56人の江別兵村入地が最初でしたが、兵屋が完成したのは10月で、開拓使は10月5日付で、村名を「江別村」と名付けました。正式な江別村の誕生です。この江別屯田の最初の10戸の兵屋(住宅)は、その後の兵村とは違って、ガラス窓に暖炉付でした。今日、湯川公園で観ることができる和式木造切妻平屋が、当時の一般的な屯田兵屋でしたから、破格のモダンな住宅と言えます。因みに、このアメリカ式兵屋住宅の建設費用が、一般の兵屋の倍以上もかかる高級住宅だったことから、江別兵村は、「西洋屯田」とも呼ばれたようです。また、篠津屯田の兵屋は、寒冷地対策としてロシア式のログハウスでした。アメリカ式もロシア式も大変興味深いところですが、何れも建物の現物が残っていないことが残念なことです。ともかく、江別の開拓と街づくりは、屯田兵によって進められましたが、その中でちょっと興味深い言葉も出現しています。

皆さんは「番外地」という言葉を聞いて、何を連想するでしょうか?…70代以上の方は、高倉健主演の『網走番外地』の映画を思い浮かべるとと思います。どことなくアウトローな感じがするこの言葉ですが、何と、江別にもその「番外地」があったのです。実は、屯田兵に付与される土地は抽選で決められるために、給与地の区画毎に番号が付いていました。その中で、将来、官有地や商業施設にするための区画には番号を付けずに、無番地としました。それが、地図上では「番外地」と記されたのです。

野幌屯田兵村の「屯田兵第二中隊配置図」を見ると、野幌駅から八丁目通り沿いに、四番通りまでの間に3カ所の番外地記載が見られます。今日、野幌駅前から国道12号までの「東番外地」は、病院、飲食店街となり、二番通りから三番通りの「中央番外地」は、今日の錦山天満宮、屯田資料館、第二小学校の敷地となっています。130年前の区画が、今日の江別の街づくりの基礎となっていることに驚きます。

江別の開拓でもう一つ欠かせないのが、「北越殖民社」の存在ですが、これについてはまた別な機会に掲載させていただきます。

以上、6回に渡って続いた「むかし、むかし」シリーズ、いかがだったでしょうか?

私たちの暮らす見晴台は、団地としては半世紀も経っていませんが、昔から、人の営みと文化を織りなし、歴史を積み重ねてきたことは確かなことです。

こんな見晴台は、とりわけ“いいところ”なんですね。誇りにしたいことです…。

〔事務局〕